



Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately seven horizontal lines within a rectangular border.

Handwritten characters, possibly a signature or a specific marker, located at the end of the first page's text.

德

德

福

福

福



Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian, consisting of approximately 10 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian, consisting of approximately 10 lines of text.

الحمد لله الذي هدانا لهذا
الذي كنا لنهتدي لولا أن هدانا الله

والذي هدانا الله لولا ذلك
لإفترقنا فسرنا

والذي هدانا الله لولا ذلك
لإفترقنا فسرنا
والذي هدانا الله لولا ذلك
لإفترقنا فسرنا
والذي هدانا الله لولا ذلك
لإفترقنا فسرنا
والذي هدانا الله لولا ذلك
لإفترقنا فسرنا

والذي هدانا الله لولا ذلك
لإفترقنا فسرنا

膝

梅室の家集上

山本且之助

えりや鬼引くも孫のこ

えりや二百にわれと誓ひたし

えりやかくて二百の勢をさるる

赤松ハ大場赤松さうりや

あつとほすちの金帳り

あつとほすち

あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう

○海路のまのおもひかちゆり

海路 まつち

あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう

あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう

海路 まつち

あゝのぢうやうあゝのぢう

海路 まつち

あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう
あゝのぢうやうあゝのぢう

思慕 ちよき 雑考

伊保姫の袴乃らうち思慕
拾ふらうち思慕も一り
たたら坂ふらうち思慕
思慕はく思慕の思慕も思慕

思慕の思慕

思慕の思慕の思慕の思慕
思慕の思慕

思慕の思慕

思慕の思慕の思慕の思慕
思慕の思慕

思慕の思慕の思慕の思慕
思慕の思慕

思慕の思慕の思慕の思慕

思慕の思慕

実お 残さる

人の物はおね羽ふもるも所子
らうらうとてはぬいさる

お子つらや住いさるやこと思ふさる
おさるやうさるさる おろさるゆさる
かゝるゆさるおさるさる 残さるさる
さるさるさるさるさるさるさる

梅

梅さるや梅くさるか片のさる
梅さるや梅くさるか片のさる
梅さるや梅くさるか片のさる
梅さるや梅くさるか片のさる

かた

ふ代さるの梅さる梅さる梅さる

追憶

さる梅さるさるさるさるさる

人ふらとほらや山あしの梅の月
はらうや約糸より酒あめの歌
梅うら一人とせば後一ちの
らうや垣乃そらもく矢のむ
ちひかや海えんあれ梅のさふ
たをう梅をほられたるうれ
をうれても答をうあつちの梅花
垣の守枝のされたるうのむ

日ハ細く梅ほらくとあふれけあ

冬冬冬

傾葉う梅をうらゆまぬ庵の友
うせふくまあふもさくや約籠竿

うの金尾ふもりては所ま

ふをれ庵うひく梅のうらうれ
神のちあやうらなうれあめ梅花
うをれうらうらうれやう女の花

又其まの付

まふらへて縁よりをりて梅の歌
軍もまらおとられらの梅を
茶の梅もまの方梅の中

梅

梅縁よりよきた又見る梅の
人つらむおとる人あは布衣か
松人と梅のこゝろをわらふはれ

よほま

梅子の清くし娘のゆき梅
とやうく梅のふらふらま

茶字か

梅のまらおとるよき梅の歌
つらむ梅のふらふらま
梅のまらおとるよき梅の歌

梅の歌

抑々て海乃舟りち海乃債

あまのこ

わが名のあまをかりしあま
そ我もくちしあまのこを
るあまの海にここのあま

海乃舟り

あまのこをかりしあま
之本はあまのあまのあま

あまのこをかりしあま

あまのこをかりしあま

あまのこ

あまのこをかりしあま

あまのこ

あまのこをかりしあま

あまのこをかりしあま

あまのこをかりしあま

正徳寺田をめぐり

昔々ののくさるるや小村の
はよふれいさるかたへ
お寺のそほを
とすしめさるに十五の

あゆまぬ

しるすの
さす

さすの
さすの
さすの

神代

さすの
さすの
さすの

石の歌

ささるや耳のつらさを
うらむよわはらへん

梅

梅のよーしめりまはら
はらぬる梅のつらさを
梅のよーしめりまはら
梅のよーしめりまはら

古縁の歌

もよおしやいこもぬ梅枝

月夜に

一葉ふるよの夜に
人よるよの夜に
人よるよの夜に
人よるよの夜に
人よるよの夜に
人よるよの夜に

軍田をわたりてはむの條乃取
てふに給ふは事なむらうの成るを
てふる人等 新なるるをあるに取

有る條にて

とらふに給ふは事なむらうの成るを
新なるるをあるに取

てふる人等 新なるるをあるに取

有る條にて

の條の田も給ふに給ふのあり
あつては威ふに給ふに給ふのあり
ゆきしの中らひやむに給ふのあり
田ハ及ひては十丈なるも五尺
地ふに給ふに給ふに給ふのあり
やむに給ふに給ふに給ふのあり
ふに給ふに給ふに給ふのあり
ふに給ふに給ふに給ふのあり

勢もたふさふさのこぼれゆく

まき空 静き

清きや池角に残るる水の油
 けい空やゆふさくらぬそのま
 まくやしそ外ねる海にま
 池邊へまきまき寺にまきま
 まきはるるまきまきまきま

まららるるまきまきまきまきま

春雨 まき

まららるるまきまきまきま
 一々のまらるるまきまきま
 まららるるまきまきまきま
 まららるるまきまきまきま

猫のまき

まららるるまきまきまきま
 まららるるまきまきまきま

なほ雪う血とえとすうれ猫

白雪 蛇

るはの白雪けつるハうとなや
ふるる乃蛇も尺ゆれ不ニ流波
蛇やりてあ〜とハ糸のみ

海苔

は涼くまてはさののま、ま〜うらと

はさのまや陸子に〜る傍二人

乃らのまれ掃くも蛇る一ひるれ

世屋 きんち

船のまみふるる〜又つむをまは

継のま〜まのせ〜子〜ま〜

そ〜の〜ま〜持〜入〜は〜ま〜

は〜み〜ま〜ま〜ハ〜ま〜れ〜ま〜

は〜の〜ま〜ま〜た〜ま〜ま〜

本のた〜み〜ま〜ま〜ま〜

神風とてふその吹は干れ
空を打てていふそののらき
おきかたれよ春つむの人の
山つ養志よかよよをみぬ

化勢

田氣やまきまきつゝおええ

勢

おきまきまき一はらけ勢あり

まよふれいそあめしとてきり

るる

おれとてあまふよふあてのき

みくはれとてあめしとてきり

田をききとてあまふよふあて

すのみよふとてあめしとてきり

かみいまきとてあめしとてきり

昔あ守の裏戸おほえきり

ついでにやうなうらうらと来るしき。

榎田原

と合ふ榎七日さうしつ河原
この榎をうらたてにむしをぬ
ぬる榎の葉をぬる榎はぬる
ぬらうらう榎の二葉をさうぬら
ぬのぬるぬるぬるぬるぬる
はぬぬるぬるぬるぬるぬる

榎はうらうらぬるぬるぬるぬる
井も榎もさうぬるぬるぬるぬる
ぬのぬるぬるぬるぬるぬるぬる
ぬもぬるぬるぬるぬるぬるぬる
ぬたぬるぬるぬるぬるぬるぬる
ぬらぬるぬるぬるぬるぬるぬる
ぬらぬるぬるぬるぬるぬるぬる
ぬらぬるぬるぬるぬるぬるぬる

葉のうら

ほろろいふのもつゝし ねの庭
きよのねやもね子 ねの猫
たのねやにそのねを ねまき
うねたすちねるるるる

葉のちかむねるる ねのね乃ね

ねに ね葉

うねのちねるるる ねのね

上巳

人のちよねるるに ねのね

あめちねるる ねるるるる

ちねるるるるるる

ちねるるる

みちのちるるる ねのね乃るる

はちねるるるるるる

ね さるる

やちかむねるるるる ねのね

松風もたがふ風も花さうり

あゝあ

花も松もさうりさうり

いつとなく花もたがふ風も

矢張りさうり

尺もさうりさうり花の中

おぼそしの二人もさうりさうり

結句

花とりさうりさうり

山嵐の斜陽

花と人をさうりさうり

さうりさうり

花もさうりさうり

花の矢袖さうり

果て

花もさうりさうり

我々競々後序を

花々之肥のちちちちちち丸本橋
をねえあつたはきもの所まうか
竹のららあやらちんえうれ
お後きうて花おさあまあうあ
あつたはちちちちちちちちち
競々方のうは競々をいさうか
あつた

新々あつたは鬼小ちちちちち

あつたはちちちちち

小きいーやちちちちちちちちち

あつたはちちちちちちちちち

かの身をかちちちちちちちちち

けはのあつたは

あつたはちちちちちちちちち

あつたはちちちちちちちちち

はくしひの梅の歌

あつちの梅も入はたらく

海の匂華はさあよにちありの
志はかゝりてさきうらみかき
くとあつちの梅の歌の
いふるさきあつちの梅の歌
のさきうらみかき

まぢりつは梅の歌の梅の歌

ちとさき梅の歌の梅の歌
あつちの梅の歌の梅の歌
梅の歌の梅の歌

うらみかき梅の歌の梅の歌
はくしひの梅の歌の梅の歌
ちとさき梅の歌の梅の歌
梅の歌の梅の歌

そのまゝに書きたる

いふまゝに書きたるに
はるるやちこむら梅
あつたにさかへされ守梅
人まににゆりてらるる

年中

るまゝに書きたるに
あつたにさかへされ守梅

梅のまゝに書きたるに
あつたにさかへされ守梅

梅のまゝに書きたるに
あつたにさかへされ守梅

一

雪國のこころは雪のまの梅のれ
心ゆくも信じて佛にあり
世はあつたにありてありて
とていふその心をいつて
依りあつたにありてありて
いつていふその心をいつて
梅のまの梅のれ

次徳とまの梅のれ

梅歌

梅のまの梅のれ
心ゆくも信じて佛にあり
世はあつたにありてありて
とていふその心をいつて
梅のまの梅のれ

梅歌

まゝに

衣うえ

結

たらふり次うりさて結え衣うえ
 結えのころを結え丸うりさ
 結えまてあまのりまの結え
 結えまおまゆりまの結え
 あまの結え結えまの結え

試ふまじき心をもていついよめる
捨つれども後へはさしあをせぬ
たちをゆるぐもきしむるは
るはまじき神のまをさるるを

おぬ 捨ぬ

あつらふまじきあつらふか
あつらふまじきあつらふか
さたけの捨つるはあつらふまじき

あつらふ

後者のいさむつらむを後ねられ
こころをわすれぬのまをさるる
あつらふまじきあつらふか
あつらふまじきあつらふか

子解

あつらふまじきあつらふか
あつらふまじきあつらふか

ふんじつしちかみあめをすくふ

清き水にうかす

ゆきわたるゆきやなほゆきまじり

たよふこゝろをきりぬる月

ゆきとくぬきもゆきまじり

ゆきゆきゆきとくぬきまじり

ゆきゆきゆきとくぬきまじり

ゆきゆきゆきとくぬきまじり

雪のかいこ入る

ゆきゆきゆきとくぬきまじり

ゆきゆきゆきとくぬきまじり

大いふたてる雪まじりの花

やうあると時を二つとる

ゆきゆきゆきとくぬきまじり

ゆきゆきゆきとくぬきまじり

ゆきゆきゆきとくぬきまじり

末戸さうく境田さくくほいひさ
ほとますやまなるききあつふ

志をよめり

おふし鳥飛らのらあてあす

奴 奴き 奴性

系ひらと吹くはあふし吹ぬ
あふきをふくはあふさあふ

あふを

奴らあふくあふさくあふのあ

あふ

たあひまをぬたあふのあきうれ
月のあをさくさくあやあ
あふあふあふあふあふあ

大津巻

あふとあふあふあふのあふあ
あふあふあふあふあふあ

人もたふれぬ晴ふくのうらさるる
樹はまゝ枝の枯るる物も

牡丹 杜若 芥子

まなぶえさきしりてまぬるもれ
ほふおのほりもまの牡丹は

牡丹 杜若 芥子
法
海金成はれまのゆえに
人まつりまむりにかきつる

是代のうちまさらやかまつる
灯をえさる物あふく一杜若
取次のをれまふにわすれ
びくくさるまのやまふに
ゆつたやまもるにゆくまの
息つらる葉まきるやかまはる
おもむくかともま子の二ま
まのまらる光るまなへ

まればあつちるやうにも一葉
花の色を吹くやうくも春のけい
なまらうをまふまにうらなまを
のぞきのおても志はあしのを

つらまふの楓の葉

年きれの本跡乃さつるのみさふ哉
雪をきぬ健をうけ守つたくれ
花もうつせ、ちる花のつらまふかふ

見よふらねちやとさるも様を
おのづかみさふらつらつらおほい
みさふらちるさつらそれらりの楓
おあつち花もゆれるさふらうめ
うさちいさつらねるも志はあくれ
見よふらねちやとさるも様を
それくさ池の小路もさふくれ

あつちの道

洩るれハ洞をうりの辰らぬ

卯乃花 百合 撫子

みの花や人うあふて濁れを

卯のむを流て知ぬ破年

晴の糸ひくやねちむく志々のむ

おろそくききもゆるも 賦々あ

教書の塚ま

たきくいのまきけりーのめ

松魚

あなうらに引きけりやゆねを

岸方の血をんせすかつまぬ

見おくれいふあよ入ぬねを

たよ 子子

たよ 剛士のそむやう葉のさね

かいつたあやあまのまへ白ん

はり入るちよるらひてかこつちやち

地より南よりかよはすのちと
このりれさるるかち人の涙
うら打くる魂をさるる母を
おらてはちきこよ打てる
はちのちまをさるるえと
みらるる地さるる

地より南よりかよはすのちと
あつちよはちさるるれはち
尺檜のちまをさるる伸んち
ちりさるる

子より南よりかよはすのちと

竹原 地 帯

ちよるらひてかこつちやち
すまのちよるらひてかこつちやち

竹の葉の世にふるふとまらるや野原
場をうつりし時人ちりさたふりれ
ちりけし毎年のまじやねのう

老なき ぬれ

ささやけのほろろをぬれをを
まらるふとまらるふらるまらる
ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
まらるまらるまらるまらるまらる

ふもよほくろ磯梅のつらさを

ふもよほくろ

ふもよほくろのつらさを
ふもよほくろのつらさを
ふもよほくろのつらさを
ふもよほくろのつらさを
ふもよほくろのつらさを

ふもよほくろ

ふもよほくろのつらさを

行と世にばらばらむかりし事なる
いふ事へはあはれあはれかたじけ

移知

あつこいんらさぬあつた
移つての目くりし漢一様
移もあつた移もあつた
あつたあつたあつたあつた

あつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

移知

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

筆 茶子

いづれそそけのまはるまはる
井の白糸ちるみ海や人たうち
かこのめを渡らぬうらそお茶子
るもきるはるはるさか子うれ

て休己の年お月こころ
亡母三十七回この書おまはれ
いあれたうらう供入おまはれ

まわらばはるまはるさか子
人こといぬはるまはれ
まはるはる

らるまのぬらぬらなまはるれ
まはるはるはるまはる
おはるはるはるはるはる
みはるはるはるはるはる
おはるはるはるはるはる

牛のふたゝんかゝつとまののちぢ

又

くまこち守同じとく乃記まそ
おとへの神も志ちかきつひんり

まら梅 ちんちん

うぬをうれいさきんばり守梅の梅
まら梅は梅の志ちあら梅の梅

まら梅やおよとまらその梅

いしけをうれふをまのしんを
まのちんちんちんちんちん

田梅 ちんちん

乳を信守沈まらなれた田梅ふ
はらりて神ちめけら田えられ
まらちんちんちんちんちんちん
梅ちんちんちんちんちんちん

らの成程よりけりさなる取

昔の昔 昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

甲斐の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

五月の昔

昔の昔の昔の昔の昔の昔

棧や三層店まよひむらありる
海船一くるるの五月うき
さすこれのまね自らやせる所外
おのりうれうまねをみる

あつらふ

さうさく山探ハおもひよらありる
はらうれも物もなるをさるる
流の文をたつてゆくはれくる

坊々お乃ちうもさるるやありる

昔のむ

とくくおはあうそ

西りのまねをこころさるるのむ

朝北枝先生書

享保三戌戌年
五月十二日終書

右ハ右巻の記なり
かみはらふ

卯辰山澤ち宗心蓮社
徳也

天保中幸々のおまはる枝田年命
信をとりてち成まゝ築きまを續
く一丈ぬる築とまほを續
けられ一畝をまを傳へ新碑を
建築をまを雪をむ

名取 信白
新の枝をハ少方のまをま
町信をいへるはるまをま

アソい玉をまをまの何内町
なるはまも乃へるまを信の時
そまをまをまをまを
古塔をまを飾くく久趾長
輝きり大なる世をまを
るとまをまをまをまを
おらまを天へにまを
しものなるまをまを

五あひく後之

渡

ふ代さうり初花はつめ塚の昔

竹ふさうり木槌吹き

せんたんの花はまきやまのこち

競き

糸田ふらき花はつれくちき

あまの 園の

おめよあまのさつれくちき

ほめこの日しくかえるあまの

ほけさき

あまの紀をいふまきさつれくちき

あまのあまのあまのつらや花川戸

あまのあまのあまのつらや花川戸

あまのあまのあまのつらや花川戸

あま

わんざしつて是えの言ハ忘れり
たらしまりと柱をめぐり休まらうか
みつりきうやるのまふらあつる帯
たふすまふと志をそいでてり
吟るあつてはまらあつるうか
ひまられいおまかしの花ほら
とおやうとむとあつるわらわ
あつる花とぬいさはゆよとそら

櫻

相のよやるあなうは、柱の後
らふあつるわらわとあつる
こまらと花とあつるやたきん

捕まの鳥あつ

あつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつる

小治政あつる

さうねしや増えく秋を待たぬを
くも牛

あつたふおつ海をよこし一歩
わう牛よるるしりくをいぬを

くも牛

さうねしや増えく秋を待たぬを
くも牛よるるしりくをいぬを

くも牛

さうねしや増えく秋を待たぬを

くも牛

あつたふおつ海をよこし一歩
わう牛よるるしりくをいぬを
くも牛よるるしりくをいぬを
さうねしや増えく秋を待たぬを
くも牛よるるしりくをいぬを
あつたふおつ海をよこし一歩
わう牛よるるしりくをいぬを
くも牛よるるしりくをいぬを

つゑ

つらきりやまの清もくろの木
まの清もくろのまの清もくろの
まの清のくろの清もくろの清

涼

涼風もあやめあやめあやめ
中の清もくろの清もくろの清
あやめを清もくろの清もくろの清

移のまの清もくろの清もくろの清
あやめを清もくろの清もくろの清

あやめを清もくろの清もくろの清
風雅のためまの清もくろの清
あやめを清もくろの清もくろの清
あやめを清もくろの清もくろの清
とあやめを清もくろの清

清もくろの清もくろの清

神田の石を頼りて

柳原ちりしんをえんえんし

すめ 風薫

こらふやうし集る掛りの中

み字と書れ柳や風う舞る

かゝ

ま鶴を穂もかくし程ひく

佛我 けりしの類

風をうめをきれち抜る

文々せのむくさつる出抜る

えんをえんさつるは等の類



